二松学舎大学附属図書館

quarterly report 季報

論語（竹簡）

目次

- P2 一般から個へ、抽象から具体へ　塩田今日子
- P3 本を探す旅 ―顧千里『国語』校本の行方を追って―　小方伴子
- P4 『紅楼夢』の面白さ　植松宏之
- P5 私の研究　久米晋平
- P6 新スタッフの紹介／九段図書館だより／大学資料展示室より
- P7 館報がWebで閲覧できる文学館
- P8 図書館だより

No.87
2013（平成25）年
11月

一般から個へ、抽象から具体へ

文学部　国文学科　教授　塩田　今日子

学問の世界では、個別の事象よりも一般的なことを重んじる傾向があるような気がします。個人的な経験よりも、たくさんの統計的なデータに裏打ちされたことのほうが、より説得力があると考えるのが普通でしょう。しかし今私は、一般的、抽象的なことよりも、個別的、具体的なことに深い関心があります。

たとえば外国語の教科書は、よく使われる挨拶言葉や、道を尋ねる、店で買い物をする、自己紹介をするなどの一般的な会話文を用い、基本的な表現や文法を覚えるようになっています。

しかしそのような「一般的な会話」は、実は結構覚えにくいものなのです。実際の場面に遭遇しても、すぐには覚えた会話が口をついて出てきません。

ところがこれに対し、話しているのを実際に見聞きした会話は、印象的で覚えやすく、似たような場面に遭遇すると、意外と簡単に口をついて出て来たりするものです。これは一体どうしたわけでしょうか。

「一般的な会話」は文字どおり「一般的」で具体性がありません。具体性というのは、その言葉が発せられた状況、話し手、聞き手、彼らの顔の表情、感情、口調などです。それらはすべて言葉の意味を形成する重要な要素なのです。厳密に言えば、そのすべてが言葉の意味に含まれています。普通の教科書に出てくる会話は、それらの要素が抜け落ちているので、何度反芻しても、気の抜けたビールのように、会話の本当の意味を味わうことができないのです。

もちろん、具体的な場面で使われる会話は無限に存在するので、そのすべてを網羅して学ぶことはできません。しかし、いくつかの個別の場面での意味を本当に正しく理解することさえできれば、すべてを網羅する必要はないのです。

それは、ジグソーパズルでかなめのピースをいくつか正確にはめれば、他のピースも自然にはまりやすくなるのと同じ原理です。ひとつの言葉（単語）は、言語というジグソーパズルのピースのようなものです。もしも一般化という手法で、単語の意味(ピースの形)を曖昧にしてしまうと、他の単語（ピース）も正しく理解すること（はめること）はできなくなります。

専門である韓国語を教えながらそのことを痛感した私は、教科書を作る際に、韓流ドラマのシーンを使うことにしました。韓国の俳優はみな表情が豊かで、台詞に気持ちがこもっているので、言葉の本当の意味を理解するのには最適です。

まず苦労したのは、初級の学習者にふさわしいシーンを選ぶことでした。教科書であるからには、文法的に単純で基本的な構文から学べるようにしなければならないからです。登場人物の人間関係も言葉の理解に不可欠な要素なので、題材とするドラマはひとつにしぼりました。

そのつぎに大変だったのは著作権の問題です。最初は映像使用も考えていたので、シナリオの著作権から俳優の肖像権まで、すべてクリアしなければならず、韓国の放送局に何度も足を運んだり、俳優の事務所や、はたまた俳優自身の携帯にまで電話をかけたりすることもありました。結局教科書に映像を使用することは叶いませんでしたが、何人かの俳優と実際に話せたのは楽しい経験でした。そうやって作られたのがこの教科書です。(写真)

このような一般から個へという考え方は、他にも通じるものがあると思います。社会においても、常識的なこと、一般的なことから外れないのが良いことのように思われる傾向があります。しかし個人というピースが「一般的な形」になろうとした結果、社会というジグソーパズルは、うまくはまらずかえって混乱してしまったのではないでしょうか。個人が「一般」に合わせるのではなく、「個」を極めて、本当の自分らしさを追求すること、「自分」というピースの本来の形を取り戻すことこそが、生き生きとした社会というジグソーパズルを完成させるのに重要なのではないかと思います。

本を探す旅　―顧千里『国語』校本の行方を追って―

文学部　中国文学科　准教授　小方　伴子

書物に関わる学問分野のひとつに校勘学がある。長澤規矩也『図書学辞典』（汲古書院）で「校勘学」を引くと、「同一書の各種伝本間における字句の異同を調べ、できるだけ、その本の原本の姿を再現しようとする学問」とあり、さらに「清代に盛行した考証学の一派で、顧廣圻のごときは、これを専業とした」とある。

顧廣圻（1766―1839）は江蘇元和の人。字を千里といい、そちらで記されることが多い。大正時代にその年譜を書いた神田喜一郎は、墓誌銘の「家は平素より貧しく、常に人のために校刻をし、糧を得て暮らしを立てていた。行き来する人はみな名のある高官であったが、自らを潤す手段をもたなかった（家故貧、常以爲人校刻、博糈以食。雖往來皆名公卿、未嘗有以自潤）」（李兆洛）を引き、「殆ど一生他人の爲に古書を校刻することを以て、其の生業としてゐたので、其の成就した功績には千古不滅のものがあるにも拘はらず、千里の名は余り著はれないで、多くは他人の功績に歸せられてゐるのである」と述べる。

顧千里には春秋時代の史書『国語』の校本（書き入れ本）がある。恵棟、盧文弨、段玉裁などの校語が写しとられている貴重なものである。その校本が北京の中国国家図書館（旧北京図書館）に所蔵されていると知ったのは、李慶氏の『顧千里研究』によってであった。同書は顧千里の年譜や業績を一次資料にもとづいて詳細にまとめ上げた労作で、顧千里及び乾隆嘉慶の校勘学の研究にとっては必見の書である。そこに「千里の伝録本は、後に昔の京師図書館に収められ、今は北京図書館に蔵されている。その底本は明万暦間刻本で、筆者はかつて目にしたことがある（千里的傳録本、後歸前京師圖書館、現存北京圖書館。其底本爲明萬曆間刻本、筆者嘗見之）」と記されている。重刻明道本の刊行に与るなど、『国語』の伝承における顧千里の役割は大きい。私はこの「伝録本」（本稿でいう所の校本）を何としてもみたいと思った。ところが不思議なことに、『北京圖書館古籍善本書目』（1987年）にはその記載がない。それでも李慶氏はご覧になったとおっしゃるし、目録の誤りということも考えられる。ともかく現地に行ってみることにした。

北京の国家図書館で事情を話すと、館内の図書カードを調べるようにいわれた。該当するカードはすぐにみつかった。しかし肝心の書籍はなかった。「蒋介石とともに台湾に渡った」とのことであった。

今から八十年前（1933年）、北京故宮博物院所蔵の重要文物は、戦火を避けるため上海に移された。その後、南京、重慶を経て、1949年に台湾に運ばれた。顧千里の『国語』校本は、その「文物疎開」の中に含まれていたらしい。台湾の国立中央図書館（現国家図書館）の蔵書目録『国立中央図書館善本書目』をみると、確かに、「國語二十一卷二冊、呉韋昭注、宋宋庠補音、明新建李克刊本、清顧廣圻朱墨合校并跋、北平」とある。最後の「北平」は、「中央図書館が南京から台湾に運んだ旧蔵の版本（本館自南京運臺舊藏之本／凡例）」である。台湾国家図書館HPの「中文古書書目資料庫」にも、「清顧廣圻朱墨合校并跋、明新建李克家校刊本、現藏者國家圖書館」とある。私は北京のホテルから台湾国家図書館に連絡をとり、閲覧に必要な書類を大急ぎで揃えた。

一週間後、台北にある台湾国家図書館の善本閲覧室を訪れた。所属機関の紹介状と研究概要を提出すれば、原本はすべて閲覧させてもらえる。マイクロフィルムのあるものは、全巻プリントアウトが可能である。その気前の良さに驚嘆した。しかし残念ながら、顧千里の『国語』校本はそこにもなかった。「故宮博物院に移された」とのことであった。翌日、故宮博物院の図書文献館を訪れた。国家図書館の方が連絡を入れておいてくださったこともあり、簡単な申請書だけで閲覧が許可された。

善本閲覧室には人がほとんどいなかった。大きなテーブルを独占して、顧千里が版本に書き入れた文字を写していった。正味二日間の滞在だったので、欄外の校語だけを写した。半年後に再び訪れて、版面の校勘記を写した。さらに半年後、部分的な確認のためにもう一度訪れた。写し間違いがないよう何度も、何度も見直した。これ以上確認のしようがないところまで確認し、ようやく作業を終えた。達成感よりも、もうこの校本をみることはないのだという寂しさの方が大きかった。

いま改めて、北京図書館の目録を古いものから順にみていくと、『北京図書館善本書目』（1933年）に「國語二十一卷、呉韋昭注、宋宋庠補音、明刻本、顧千里校並跋」とあり、それ以降の『國立北平圖書館善本書目乙編』（1935年）、『國立北平圖書館善本書目乙編續目』（1937年）、『北京圖書館善本書目』（1959年）にはその記載がない。1933年に上海に運び出され、1949年に台湾に渡ったであろうことは、それで推測がつく。事前に故宮博物院に問い合わせをすれば、まわり道をせずにすんだはずである。しかし本を探す旅は楽しかった。行く先々で有形無形の収穫があった。意図したことではなかったが、幸いであったと思っている。

『紅楼夢』の面白さ

文学部　中国文学科　非常勤講師　植松　宏之

清代・曹雪芹によって書かれた長編小説『紅楼夢』は、古典小説の代表として現在に到るまで多くの読者を獲得し、中国の社会や文化に深く浸透しています。ただ、日本において『紅楼夢』の知名度はそれほど高いとは感じられず、明代に成立した『三国志演義』『水滸伝』『西遊記』といった作品が日本でも中国でも広く受け入れられていることと違いがあります。そこで、ここでは明代の小説とも比較しつつ『紅楼夢』の面白さについて少し考えてみたいと思います。

まず小説の内容について簡単に説明すると、『紅楼夢』は「賈家」という大貴族の家庭が主な舞台となります。賈家はとある王朝の建国に功績があった事により代々続く家柄ですが、微かに没落の気配が感じられる中で物語は始まります。物語の中心となるのは、賈家の邸宅内にある大きな庭園「大観園」に暮らす貴公子・賈宝玉と林黛玉、薛宝釵など「金陵十二釵」といわれる十二人の少女たちです。他にも一族や彼らに仕える使用人など数百人にのぼる人物が登場します。物語の大半は大貴族の家庭で暮らす人たちの華やかで楽しい日々の暮らしが描かれますが、その中で徐々に進む腐敗や退廃がやがて賈家に大きな打撃をあたえ、賈宝玉や金陵十二釵の少女たちもそれに巻き込まれていきます。

大貴族の一家庭という『紅楼夢』の舞台設定は確かに特別なものですが、賈家が大邸宅であるといっても結局は一つの家に過ぎません。それはたとえば、数多の豪傑英雄が登場し混乱から天下統一という大きな歴史の流れを描く『三国志演義』や、次々とあらわれる妖怪を倒しながら経典をもらうため遙か西方の天竺を目指す『西遊記』のような壮大な物語とは異なります。また、この舞台の上で描かれる事柄の多くも朝晩の食事であるとか家族や友人との会話といった日々の生活の様子です。その中で誰かの誕生会であるとか、正月や中秋の名月といった季節毎のイベントなどが少し大きな出来事となります。時代も国も環境も違っていても、こうした日常は想像し理解することができる身近な出来事です。たとえば、数十万人の敵軍と対峙する『三国志』の戦場や、空を飛ぶ妖怪と戦う『西遊記』の荒れ地を想像するのとはやはり異なります。

中国の古典小説はしばしば講釈師が聴衆に物語を語って聞かせるというスタイルをとります。講釈師の口ぶりに由来する常套語の一つに「話すことがあれば長くなるし、話すことがなければ短くなる（有話即長、無話即短）」というものがあります。特に出来事がなければ話を省略し、読者の興味のある大きな事件へと物語を進めるためです。ところが『紅楼夢』ではこの「話すことがない」部分を丁寧に語っており、そこがかえって『紅楼夢』の面白さとして小説の価値を高め人気を集めているのです。話を飛ばされてもおかしくない日常を多く描く小説が単調で退屈なものにならないのは、その日常を暮らす登場人物の魅力にあると思います。『紅楼夢』では美しく才気にあふれた大観園に住む少女たちをはじめ、他にも様々な身分・職業の人々が生き生きと描かれています。人物は単体でいるだけでは、物語は成り立ち得ません。中国の古典小説は人物の個性を表現する手段として、人物単体の内面を掘り下げるよりも人物同士の関わり合いによって特性を描くという方法が多く用いられてきました。『紅楼夢』においても、各場面に登場する人物の身分や世代の構成によって複雑な人間関係が描き出されています。日常生活のなかで繰り返される、とりとめのない会話や何気ないしぐさが、後の場面で思いがけず影響をあたえることもあります。これは賈家という比較的狭い空間の中で物語が展開し場面が蓄積されているからこそ可能な表現であると考えられます。また、「とりとめのない」「何気ない」表現は一度通読しただけでは気づき難く、幾度も繰り返して読み進めていくことによって新たに発見することができます。このことが『紅楼夢』を読み、研究することの魅力となっているのです。

ここまで見てきたように日々の生活を主な舞台とする『紅楼夢』は、説明が難しい小説でもあります。『紅楼夢』は明治以降すでに数種類の日本語訳が出ていますが、ちょうど今年の9月から井波陵一氏による新たな訳本が岩波書店より刊行されました（全7冊予定）。原本とも対照しつつ、いくつかの訳本を比較してみていくのも『紅楼夢』の楽しみの一つといえると思います。

「林黛玉像」（南京・紅楼文芸苑）

私の研究

本学非常勤助手　久米　晋平

私は、中国思想史、なかでも明末清初期の儒学思想（主に朱子学、陽明学）を研究しています。研究にあたっては以下の二点を軸に据えて資料の読解を進めています。

（1）当時の儒者は何を考え、どう生きたのか？

（2）当時、『四書』（『大学』『論語』『孟子』『中庸』）はどのように理解されていたのか?

（1）について。現在は関中（現在の陝西省）の儒者李二曲（名は顒、1627～1705）と馮少墟（名は従吾、1556～1627）の言説を中心に読解しています。これまで李二曲については、彼のいくつかの主張―「悔過自新」（自らの過ちを反省し、自らの力で自らを一新する）、「明体適用の学」（本体を明らかにし実用に適う学問）、「自奮自立」（自らの力で自らを確立する）―に着目し、その内容を解明すべく論考を発表してきました。結果、そのいずれも自らを深刻にみつめる態度が前提となっていること、孔子、孟子はもちろんのこと、朱子や王陽明など、ひろく先人の言説を積極的に取り入れ、その内容を実践してゆく姿勢が浮き彫りになりました。李二曲が孫奇逢（1585～1675）や黄宗羲（1610～1695）とともに「清初三大儒」と称されていたことを考える時、李二曲の実践重視の姿勢は「清初三大儒」の一要素であったと言えるのではないでしょうか。

今後は孫、黄両氏との比較や、同郷の先人であり、李二曲が尊崇してやまなかった馮少墟との相違点を明らかにし、さらに「清初三大儒」が意味するものを解明したいと考えています。この作業は、明末清初期の儒者が何を考え、どう生きたのかを知る手立てになると思われるからです。

（2）について。二松學舎大学に入学し、何も分からずに受講した「中国哲学研究」（松川健二先生）―『論語』に対する朱子や王陽明などの注釈に即して、朱子学や陽明学の特徴をつかむ―は、印象に残っている授業のひとつです。授業では、例えば学而篇第2章の有子のことば「君子は本を務む、本立ちて道生ず、孝弟なる者は、其れ仁の本為るか」が、朱子に従えば「……孝弟なる者は、其れ仁を為うの本か」と訓まれることに衝撃を受け、その根拠となる「仁は愛の理、心の徳なり」「仁を為うとは猶お仁を行うと曰うがごとし」といった朱子の言説を提示されて、何とか「其れ仁を為うの本か」と訓むしくみを理解することができました。確か、5月の連休明けであったと記憶しています。この時の“興奮”が『四書』解釈史に興味を抱くきっかけになったと思います。

この分野は、既に佐野公治氏『四書学史の研究』（創文社、1988年）、吉原文昭氏『南宋学研究』（研文社、2002年）、松川健二氏『論語の思想史』（編著、汲古書院、1994年）、『宋明の論語』（汲古書院、2000年）をはじめとして先行研究が豊富です。ただ、日本においては李二曲の『四書反身録』を主体的に取り上げた論考がなかったこともあり、まずは彼の『四書』に関する言説を読解するところから始めました。読解を進めてゆくうちに、彼の『四書』理解は（1）において指摘したいくつかの主張が如実に反映されたものであり、時にそれは朱子『四書集注』や『四書大全』からも逸脱していること、あくまでも『四書』を「反身実践」の材料として捉えていることが明らかになりました。今後は、李二曲と同時代の人士の『四書』理解にも視野を拡げることにより、明末清初期の儒学思想の一端を解明できればと思います。

明末清初期の儒学思想は、単に中国における展開に止まらず、日本にも多大な影響を与えました。この観点も意識しながらさらに研究を進めてゆきたいと考えています。

新スタッフの紹介

九段両図書館に
新しいスタッフが参りました。
ひと言ご挨拶を
させていただきます。

丸山　　静

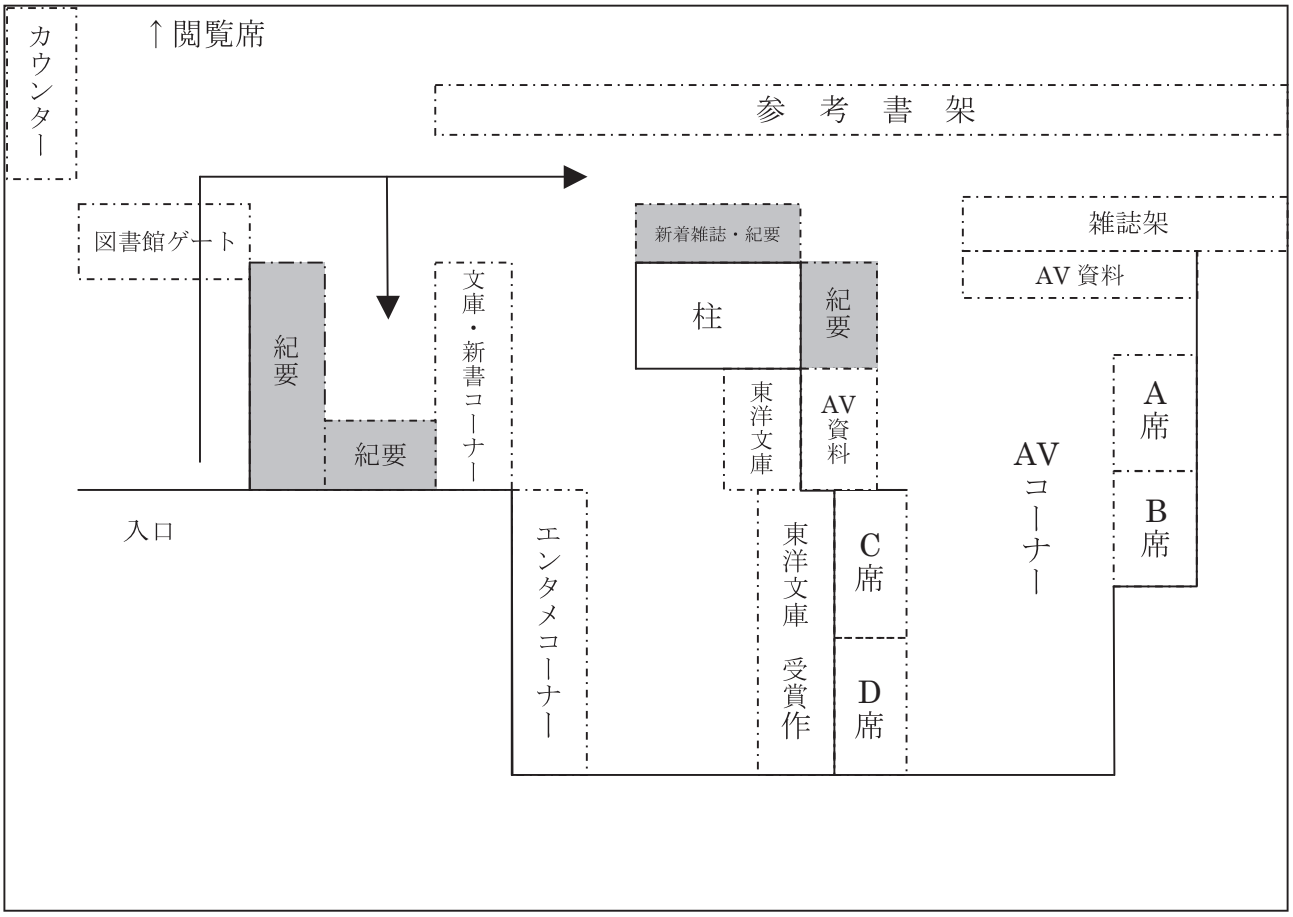
7月から九段図書館に配属になりました。皆様に教えて頂くこともまだ多いと思いますが、頑張りますので、よろしくお願いいたします。

九段図書館だより

紀要の配架場所が変わりました。

最近の紀要をB2電動書架に配架していましたが、B1入り口右手に配架しております。

下記の各場所に、発行所別、アイウエオ順(例：東京大学ならタ行のところ)に配架してあります。



大学資料展示室より

11月・12月の企画展示は『論語』関連の展示が予定されています。表紙の竹簡も展示される予定です。

お近くへお越しの際はぜひお立ち寄りください。

1月・2月の企画展示も行われる予定です。楽しみにお待ちください。

館報がWebで閲覧できる文学館

世にたくさんある文学館のうち、館報をWebで閲覧できるところを集めてみました。そのうちのいくつかをご紹介します。作成するうえで、文学館研究会のサイト（http://literarymuseum.net/index.html）を参考にさせていただきました。

仙台文学館　http://www.sendai-lit.jp/
〒981-0902　仙台市青葉区北根2-7-1
仙台文学館ニュース　http://www.bunka.city.sendai.jp/backnumber/bungakukan.html　（22号～）

斎藤茂吉記念館　http://www.mokichi.or.jp/
〒999-3101　山形県上山市北町字弁天1421
斎藤茂吉記念館　館報　http://www.mokichi.or.jp/letter.htm（最新号）

松竹大谷図書館（演劇と映画の専門図書館）
http://www.shochiku.co.jp/shochiku-otani-toshokan/ l
〒104-0045　東京都中央区築地1-13-1　ADK松竹スクエア3階
公益財団法人松竹大谷図書館ニューズレター　http://www.shochiku.co.jp/shochiku-otani-toshokan/pub/

文京区立森鷗外記念館　http://moriogai-kinenkan.jp/
〒113－0022　東京都文京区千駄木1-23-4
文京区立森鷗外記念館NEWS　http://moriogai-kinenkan.jp/modules/contents/index.php?content_id=32

世田谷文学館　http://www.setabun.or.jp/index.html
〒157-0062　東京都世田谷区南烏山1-10-10
世田谷文学館ニュース　http://www.setabun.or.jp/report/pub_news.html

三鷹市山本有三記念館　http://mitaka.jpn.org/yuzo/
〒181-0013　東京都三鷹市下連雀2-12-27
山本有三記念館館報　http://mitaka.jpn.org/voice/yuzo/report.php

中原中也記念館　http://www.chuyakan.jp/00top/01main.html
山口県山口市湯田温泉1-11-21
中原中也記念館館報　http://www.chuyakan.jp/15kanko/15flame.html

高知県立文学館　http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/
〒780-0850　高知県高知市丸ノ内1-1-20
館報　藤並の森　http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/（51号～）

北九州市立松本清張記念館　http://www.kid.ne.jp/seicho/html/index.html
〒803-0813　福岡県北九州市小倉北区城内2番3号
松本清張記念館館報　http://www.kid.ne.jp/seicho/html/kankou/back.html（バックナンバー）

図書館だより

図書館カレンダー　開館日・開館時間は変更することがあります。詳しくは図書館ホームページをご覧ください。

九段図書館

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

- 8:40～21:50
- 9:00～16:50
- 閉館

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- 8:40～21:50
- 9:00～16:50
- 閉館

1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- 8:40～21:50
- 9:00～16:50
- 8:40～16:20
- 閉館

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

- 8:40～21:50
- 9:00～16:50
- 9:00～19:00
- 閉館

柏図書館

11月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

- 9:15～16:30
- 閉館

12月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

- 9:15～16:30
- 閉館

1月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

- 9:15～16:30
- 閉館

2月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	

- 9:15～16:30
- 閉館

※11/1（金）、2（土）は、学園祭のため閉館（九段、柏）。11/4（月）、23(土)は授業開講のため開館（九段）。
※1/16（木）はセンター試験準備のため16：20閉館（九段）。1/17（金）はセンター試験準備のため、18（土）は、センター試験ため閉館(九段、柏)。
※2/1（土）は入試のため閉館（九段、柏）。2/20（木）は入試のため閉館（九段）。

編集後記

87号では、東アジアの文学・語学・思想の原稿を寄稿していただきました。執筆していただいた先生方に感謝申し上げます。

また、文学館の館報を取り上げてみましたが、文学館は数多くあります。近くの文学館を実際に訪れてみるのもいいかも知れません。（S・A）

二松学舎大学附属図書館
季　報
第87号
発行日　平成25（2013）年11月1日
発　行　二松学舎大学附属図書館
九段図書館　〒102－8336　東京都千代田区三番町6-16
電話：03-3263-6364
柏 図 書 館　〒277－8585　千葉県柏市大井2590
電話：04-7191-8758
印刷所　株式会社 サンセイ
電話：03-5227-8333